惟明親王の『正治初度百首』祝部五首について
―星の祝歌を中心として―

北原　沙友里

はじめに

正治二年（一二〇〇）に、後鳥羽院が下命した『正治初度百首』は、部立百首であるが、雑歌では部立が細かく設定されており、羈旅五首・山家五首・鳥五首・祝五首の二〇首で構成されている。本稿は、このうちの祝五首を取り上げて考察するものである。

惟明親王が『正治初度百首』(1)で詠んだ祝歌五首は以下の通りである。

① 君がへむやほよろづ代の行末をあさ日の影やさしてしるべき（一九九）

② いく千世とかぞへもやらぬ君が代のたぐひにみゆるあまつほしかな（二〇〇）

③ 万代と山はよばひてたに川の水は千とせの色ぞ見えける（二〇一）

④ ながむればあまつみそらに月はれてかねてもみゆる万代のかげ（二〇二）

⑤ 千世ふべきはこやの山のとこ松をたのむ心ぞ色もかはらぬ（二〇三）

この五首の歌材の中で、やはり目を引くのが祝部の二番目に置かれている星の歌である。『正治初度百首』は、二〇一六年に和歌文学大系より注釈書が出版されており(2)、この歌については「幾千年と数えきることもできないほどのわが君の御代と同じように見える天にある星々よ」と現代語訳を付し、補注で「数えきれぬほど多く存在する天の星々に後鳥羽院の治世の長さを喩え、その長久の繁栄を言祝ぐ」と述べている。

『歌ことば歌枕大辞典』(3)の「星」の項に「同じ夜空に輝く月がさまざま詠まれたのに比して、星の数はいかにも少ない」とあるように、和歌に星が詠まれることはほとんどなかった。そのような珍しい歌材を用いて歌を詠み、応制百首の祝題の一首に入れたことについて、何らかの工夫を見出すことができるのではないだろうか。

本稿では、惟明親王の祝歌五首の構成を明らかにした上で、賀歌でどのように星が詠まれてきたのかを考察しながら、二〇〇番歌の再検討を行うことを目的とする。

一　祝部の構成

惟明親王の祝歌は、歌材に着目すると天空の事象を詠んだ①・②・④、山を詠んだ③・⑤の二つに分けることができる。

天空の事象を題材に採った前者は、すべてが祝歌であると同時に実景歌としての美しさも兼ねた歌であるといえる。具体的には、①

は朝日が差し込む情景、②は満天の星々、④は晴れ晴れとした月の夜を詠み、いずれもそれらの情景に「万代」や「千世」を重ね合わせて後鳥羽院の治世の長久を願い、祝意を込めているのである。

後者の山を詠んだ二首は、いずれも実景としての山を詠んだものではない。漢武帝の嵩山の故事を下敷きとした③の歌(4)、「藐姑射の山」という空想上の山を詠んだ⑤は、実景歌とは呼べない。しかし、③は上句と下句で山と谷が対比され、かつ「たに川の水は千とせの色ぞ見えける」と澄んだ水の様子が詠まれている。⑤は「はこやの山のとこ松」と常緑が詠まれており、この二首からはそれぞれの情景が眼前に浮かんできそうであり、その点においては視覚的な歌だといえるだろう。

歌の典拠や発想源という観点からはどうであろうか。

①のように朝日が差し込む様を賀歌として詠む例は、以下に挙げる歌をはじめ、正治以前にも少なくない。

悠紀方朝日郷をよめる　藤原敦光朝臣

くもりなきとよのあかりにあふみなるあさひのさとはひかりさしそふ

（『金葉和歌集』二度本巻第五・賀部・三一六）

（宇治前太政大臣家歌合に祝の心をよめる）　大蔵卿匡房

きみが代はかぎりもあらじみかさやまみねにあさひのささむかぎりは

（『金葉和歌集』二度本巻第五・賀部・三二五）

④の歌も、和歌文学大系が注で、下句「かねてもみゆる万代のかげ」について『古今和歌集』の「近江のやかがみの山をたてたればかねてぞ見ゆる君がちとせは」（巻第二十・神あそびのうた・一〇八六）の歌を引く。⑤の「はこやの山のとこ松」も、

摂政右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りけるに、祝歌五首がうちに、よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

ももちたびうらしまの子はかへるともはこやの山はときはなるべし

（『千載和歌集』巻第十・賀歌・六二六）

などの近時代の歌を踏まえたものであると推察される(5)。

さらに、田仲洋己氏(6)は「惟明の正治初度百首詠中には、漢籍や王朝物語世界への志向をも見出すことができる」と指摘し、③の歌を漢籍への志向例の一つとして挙げている。③の歌について、

初二句は『史記』孝武本紀に見える漢の武帝の所謂嵩山の故事を詠ずるが、この故事を踏まえた先行歌も「声高く三笠の山ぞ呼ばふなる天の下こそ楽しかるらし」（拾遺集・賀・二七四・仲算法師）を筆頭に決して稀ではなく、大嘗会和歌にしばしば詠ぜられる等、賀歌の定石とでも言うべき詠法であった。惟明の如上の三首に取り込まれた漢故事はいずれも人口に膾炙した馴染み深いものであり、漢籍・漢詩文に直接依拠しての詠作とは別次元の受容と理解すべきであるのかもしれないが、和歌表現に対する作者の意欲的な姿勢を看て取ることは許されてよいであろう。

と述べている。

このように、②の歌以外は、祝の歌として決して奇をてらったものではなく、伝統的に詠まれてきた歌材や近時代・同時代に好まれ

た語句を使用したものとなっている。しかし、②の歌だけが、星という、祝歌どころか和歌に詠まれることも珍しい歌材を用いているのである。

二　星の歌概観

そもそも和歌において星はどのように詠まれてきたのか。先行研究を踏まえながら、院政期頃までの星の詠歌状況を概観する。

三上桂子氏(7)は、「元来、農耕民族である我が上代人は、星に対しては、ほとんど無関心であり、（中略）天上の石と解してさほど重要視しなかったのみならず、（中略）大空に明滅する神話的な星光を、邪霊なるものとして忌み嫌ったから、日に対する如き畏敬の念も少く、又、月に対する如き神話の情も持ち得なかった。それ故、星は、古典文学に於ける積極的な主体とはなり得ず、殊に限られた文字内で、或る一つの情、又は景を詠み込まねばならない和歌の世界での扱われ方は、万葉集の昔より伝統的に限られていた」こと、数少ない星の歌は七夕の伝説や占星との関連性に於いて把えられた観念的なもの、あるいは、菊や蛍、照射等他の景物に仮託されて、修辞として把えられたものが大半を占めていることを述べておられる。その上で「星が、美なるものとして和歌の詠に上がるのは、情趣的、主情的気分を重んじる新古今的歌風が歌壇を風靡するに至った後であり、さらには、新古今集の延長上にあると言われる鎌倉末期編纂の玉葉集、及びそれより数十年後の風雅集に於てである」と指摘されている。

このような傾向は、勅撰集においても同様である。高橋弘美氏(8)は、八代集中の星歌を取り上げ、広義の星の歌（七夕歌）と狭義の星の歌（七夕以外の歌）に分け、次のように述べられている。

七夕の星については、その数から見て決して嫌われていたものではない。七夕の舶来の伝説・行事として人々は珍しがっていた。また、恋する者の忌詞となっていたためにかえって若く多感な心の奥底に沈み、会ふ・恋ふ・思ふ、が詠む中心であるのに、これ以外でも七月七日という日付、天の川という言葉、人との別れと色々な悲しみ、と事ある毎に七夕伝説と結びつけて、人々は詠み継いでいたのである。

一方、忌むものであり、美の対象でなく人々の関心の外にあったために、星は七夕歌に較べて、桁違いに少ない。だがそのために、また歌の世界に定着していなかったために、狭義の星は一旦歌に詠み込まれると、恋・追慕の情・見立ての歌による遊び・漢詩用法の歌など、様々な心をいくつかの形になって現われるのである。

狭義の星歌には、前述の通り、漢詩的用法を用いるなど漢詩の影響の強い歌が数首あり、広義の星歌の七夕歌も中国からの輸入品であることから、星歌は中国文化の影響力の強さを計る文化の一つとも言えよう。

高橋氏は、八代集の星の歌のほとんどが七夕歌であること、また星歌に漢詩の影響が読み取れることを指摘しておられる。

このように七夕以外で星を詠むことが極めて稀な中、異彩を放っているのが建礼門院右京大夫の星空讃美の歌である。

十二月ついたちころなりしやらん、夜に入りてあめとも雪ともなくうちちりて、むら雲さわがしくひとへにくもりはてぬものから、むらむらほしうちきえしたり、ひきかづきふしたるきぬを、ふけぬるほど、うし二ばかりにやとおもふほどに、ひきのけてそらをみあげたれば、ことにはれてあさぎ色なるに、ひかりことごとしきほしのおほきなる、むらなくいでたる、なのめならずおもしろくて、はなのかみにはくをうちちらしたるにようにたり、こよひはじめてみそめたる心ちす、さきざきもほし月夜みなれたることなれど、これはをりからにや、ことなる心ちするにつけても、ただ物のみおぼゆ

月をこそながめなれしかほしの夜のふかきあはれをこよひしりぬる

（『建礼門院右京大夫集』・二五二）

星の夜に「あはれ」を見出した右京大夫のこの歌は後の京極派に影響を与え、京極派の歌人が多く星の歌を詠むのである。

三　勅撰集における星の賀歌

八代集の星の歌のほとんどは七夕歌ということであるが、この傾向は八代集に限らない。二十一代集データベースで星の歌を検索すると五九六件の歌が該当するが、その中で七夕歌以外の歌は一二〇首ほどしかない(9)。さらに賀歌に限定すると三首しかない。

年星おこなふとて、女檀越のもとよりずずをかりて侍りければ、くはへてつかはしける　ゆいせい法師

ももとせにやそとせそへていのりくる玉のしるしを君みざらめや

（『後撰和歌集』巻第二十・賀歌哀傷・一三七六）

崇徳院の御時法金剛院に行幸ありて、菊契千秋といふことを講ぜられ侍りけるに　待賢門院堀河

くものうへのほしかとみゆるきくなればそらにぞちよの秋はしらるる

（『続古今和歌集』巻第二十・賀歌・一八八〇）

寄星祝といふことを　法印栄算

天つ空星のくらゐをかぞへてぞ行末とほき御代はしらるる

（『玉葉和歌集』巻第七・賀歌・一〇八七）

まず『後撰和歌集』の歌は、詞書に「年星」とあり、実際の星のことではない。つまり、八代集には、祝歌で星を詠んだ例が見られないのである。

次に、『続古今和歌集』の歌は菊の花を星に喩えたものであり、これは三上氏や高橋氏が指摘している見立ての歌だと言える。菊の花を星に喩えて詠む手法は、藤原敏行の

寛平御時、きくの花をよませ給ふける　藤原敏行

久方の雲のうへにて見る菊は天つ星とぞあやまたれける

このうたは、また殿上ゆるされさりける時にめしあけられてつかうまつるとなん

（『古今和歌集』巻第五・秋歌下・二六九）

以降、よく詠まれていたようである。菊の花を星に見立てる例は『源

氏物語』(10)にもある。藤裏葉巻で朱雀院と冷泉帝が、「神無月廿日あまりのほどに」六条院へ行幸し、源氏と太政大臣が昔、青海波を舞ったことを思い出す場面である。

主の院、菊を折らせたまひて、青海波のをりを思し出づ。

色まさるまがきの菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふらし

大臣、そのをりは同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど思し知らる。時雨、をり知り顔なり。

「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る」時こそありけれ」と聞こえたまふ。（三・四六一頁）

この場面も、星は実景として詠まれているわけではない。菊の花を星に喩えて、さらにその「星」は「にごりなき世」の「星」であり、光源氏の讃美として用いられているのである。

最後の『玉葉和歌集』の歌は、詞書に「寄星祝といふことを」とあり、祝意を星に込めた歌であることがはっきりとわかる。人臣を「星のくらゐ」になぞらえ、その数を数えることで「御代」の恒久性を詠んでいるものであり、星座の数を数えている点は惟明歌に類似する。しかし、後述するが「星のくらゐ」という表現は、新古今以降の星の賀歌によく見られるものである。

つまり、勅撰集において賀歌と星が結びつけられることは八代集時代にはなく、それよりも後の時代になってからであった。さらにその詠まれ方も限定的なものだったといえる。

それでは、歌題としてはどうだろうか。

永久四年（一一一六）の『永久百首』では雑題の一つとして星がある。

雪とのみかしらはなりていただきし星をよそめにみるぞかなしき（四九九・顕仲）

日くるれば星をいただくかみにしもはらひもあへずおける霜かな（五〇〇・仲実）

時つ鳥なかず雲ゐにとどろきて星のはやしにうづもれぬらん（五〇一・俊頼）

夕づつのなどてまだきに入りぬらんねよてふかねの音もせなくに（五〇二・忠房）

ひこぼしの心も空にはつ秋の七日の夜をやこひしかるらん（五〇三・兼昌）

我ひとりかまくら山をこえゆけばほし月夜こそうれしかりけれ（五〇四・常陸）

あまつ空夕の星のよそにても恋しき人をみるよしもがな（五〇五・大進）

しかし祝意性を帯びた歌は見出せない。また、正治以降になってしまうものの、『新撰和歌六帖』第一帖にも星題が見られる。

ほし

君が世はななつのほしをためしにてうつらぬほどをそらにしるかな（三四一）

くるるまに出でそふ星のかずしらずいやましにのみなるおもひかな（三四二）

いつも見るそらのみどりはときはにてほしのはやしのかげぞか

はらぬ（三四三）

人をわくこころとは見しおほぞらのほしのきらめきことよけれども（三四三）

この夜こそはやあけぬらめあかほしの山のはたかくひかりさえたり（三四四）

三四一や三四三の歌は、「君が世」や「ときは」という語句から祝意性が読み取れる。前後してしまうが、まず三四三の「ほしのはやし」という表現は、

そらのうみに雲のなみたつ月の舟ほしのはやしにこぎかへるみゆ

（『人丸集』・二二六）

という人麻呂歌を端緒として、かなり好まれた言い回しのようである(11)。

対して、三四一の「ななつのほし」は北斗七星のことであり、「うつらぬ」北斗七星に安定した治世が重ね合わせられている。このような詠み方は、後述の定家や家隆の歌と類似する発想であると思われる。

四　同時代における星の賀歌

勅撰集では祝歌で星を詠む例はほとんど見られなかった。その一方で、歌題としては時代が下るものの『新撰和歌六帖』に星題があり、祝賀性を帯びた歌も散見された。

ところで、新古今時代になると、賀歌で星を詠む傾向が見られるようになる。坂田光代氏(12)は、中世初期・鎌倉時代の星の詠まれ方の傾向の一つとして次のように述べる。

さまざまな思想が影響しあい、日本に伝来した星への信仰であるが、星が地上の運命を司り、個人のみならず、天下や国家、君主の運命・吉凶を表すという信仰によるのか、天皇の治世と星が併せて詠まれるようになる。星の光の静かで穏やかな様子でよく治まる御代を祝の気持ちをこめて詠っており、その穏やかな光が天下太平の象徴となっているのである。（中略）「星の宿り」「星の位」は、星座の意味の他に公卿をさすことは先述したが、宮中に列し、天皇を補佐する地位を星座にたとえるのは、おそらくは中国の北辰信仰などが関係しているのだろう。

坂田氏が例として挙げている定家と家隆の歌を次に引用する。

（天部十首）

すべらぎのあまねき御代を空に見て星のやどりの影もうごかず

（『拾遺愚草』・（詠百首和歌）・七〇三・藤原定家）

かげなびくほしのくらゐものどかにてそらにぞしるき御代のけしきは

（『千五百番歌合』(13)・千九十五番　右・二一八九・藤原家隆）

坂田氏が指摘しているように、定家の歌も家隆の歌も、「御代」「君が代」を空に、人臣を「星のやどり」や「ほしのくらゐ」に喩えて、星座が動かない様子や長閑な空の様子を泰平の治世に見立て、祝意を込めている。このような詠法は、先に挙げた『玉葉和歌集』の歌や『新撰和歌六帖』三四一の歌にも通ずるものと言うことがで

きるだろう。類似歌は『正治初度百首』にもある。

（祝）

あまのはらのどかにすめる君が代はほしのやどりもたがはざりけり

（『正治初度百首』・六〇〇・源通親）

通親のこの歌は、『正治初度百首』の祝題の中で、惟明親王以外で唯一「星」を詠んでいる歌である。通親の歌もやはり「君が代」を「のどかにす」んでいる「あまのはら」に喩え、人臣を「ほしのやどり」で表しており、同時代の傾向の中に位置付けられる一首だと言える。

このような例に対して、惟明親王の歌は、星の宿りや七つ星などの慣用表現を用いていない点、「君が代」を「あまつほし」そのものに喩え、数えきれぬ星に治世の永久性を重ねている点で、同時代の星の祝歌とは趣を異にしているといえる。

五　漢詩文における「衆星」

ここまで、星を題材に祝歌が詠まれるときは、星座が定まっている様子に治世を重ね合わせている傾向が読み取れたが、惟明親王の当該歌のように星の数に着目した例は見つけられなかった。

ここで「星歌は中国文化の影響力の強さを計る文化の一つとも言えよう」という高橋氏(14)の指摘を踏まえ、漢詩文中に星の数に言及している表現を探ってみた。平安後期成立の漢詩集である『本朝無題詩』の藤原敦基の詩に次のような表現がある。

藤原敦基

大廈新成壮麗開（大廈新たに成り　壮麗開き）
便知聖化暗相催（便ち知らんぬ　聖化の暗に相催するところなるを）
雲衢連牖衆星拱（雲衢牖に連なりて　衆星拱ひ）
鳥路当簷賀燕来（鳥路簷に当たりて　賀燕来たる）
徳于高添輪奐美（徳于高く添へたり　輪奐の美）
皇其遥得棟梁材（皇其遥く得たり　棟梁の材）
翠華臨幸薫風洽（翠華臨幸し　薫風洽く）
娯楽猶勝春上台（娯楽　猶春台に上るに勝へたり）

（『本朝無題詩』巻第一・宴賀付賀勧学院新成(15)）

「衆星拱」について、『本朝無題詩全注釈』では「多くの星がとりまく。拱はこまぬく。敬意を表するために両手を組み合わせること。（中略）北極星を廻る夜空の衆星に、一宮殿をとりまく諸宮の様子を譬喩し、ひいては臣下が君主に従い居並ぶ譬喩ともなる」と注を付けており、用例として『論語』等を引いている。

子曰、爲政以徳、譬如北辰居其所、而衆星共之。
（子曰く、政を爲すに徳を以てするは、譬へば北辰の其の所に居て、衆星の之に共するが如し）

（『論語』為政第二(16)）

『論語』では、政を徳で以て行うことを、北極星を中心に自然と星が集まってくることに喩え、徳に由れば自然と人が帰すことを述べる。

朝堂承東、嗢調延北、（朝堂東を承け、嗢調北に延び、）

西有玉臺、聯以昆徳。（西に玉臺有り、聯ぬるに昆徳を以てす）
嵯峨**嵯**嶸、罔識所則。（嵯峨**嵯**嶸として、則る所を識る罔し）
若夫長年神僊、（若し夫れ長年神僊、）
宜室玉堂、麒麟朱鳥（宜室玉堂、麒麟朱鳥、）
龍興含章、（龍興含章、）
譬衆星之環極、（衆星の極を環り、）
叛赫戲以輝煌。（叛赫戲として以て輝煌するに譬ふ）
（「西京賦」(17)）

「西京賦」は、西京（長安）二百余年の豪華さを述べたものである。右に引用した箇所では、宮殿の様子を述べているところであり、未央殿を中心に各建物が並んでいる様を、北極星とそれを取り巻く星に喩えている。

漢詩文でも、やはり君主は北極星という不動のものに喩えられ、その周囲に星々である臣下が集うことが表現される。つまり、空に輝く無数の星は、君主ではなく、臣下を指すと考えた方が適当なのである。

惟明親王の②の歌は、数えきれぬほどの満天の星々に後鳥羽院の御世の永久性を詠んでおり、第一義としては、あくまでも時間性を捉えた歌である。しかし、同時代に散見される「星のくらい」や「星の宿り」という表現、漢詩文の「衆星」などを踏まえて考えてみると、「かぞへもやらぬ」ほどの「あまつほし」という満天の情景には、後鳥羽院を中心として多くの人臣が集まり栄える様という、言わば空間性が重ねられていると解釈できるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、惟明親王の『正治初度百首』の祝五首を取り上げ、その構成を分析した上で星を詠んだ②の歌に焦点を当てて考察を行ってきた。

まず、祝部の構成を分析し、五首いずれも視覚的な歌となっていること、また②の歌以外は先行歌の表現や歌材を踏まえた歌であることを指摘した。

次に、院政期頃までの星の詠まれ方を概観し、勅撰集における星を詠んだ賀歌が新古今時代以前には見られないことを確認した。一方で、歌題としては、『永久百首』や『新撰和歌六帖』に星題が見られ、特に『新撰和歌六帖』の星題の歌には祝賀性が見出せた。

また、同時代の一般的な星の賀歌は、星の宿りや星の位といった慣用表現を用いながら、星座の定まっている様子に治世を重ね合わせており、惟明親王の歌はそのような慣用表現を全く用いず、さらに祝意を表す手段として星座ではなく星の数を利用している点で一線を画していることを明らかにした。

さらに、同時代の星の和歌とは異なり、星の数に焦点を当てている点に着目し、漢詩文の影響を受けているのではないかということを考察した。漢詩に見られる「衆星」を踏まえると、惟明親王歌は単に後鳥羽院の治世の永久性のみを星の数に仮託しているのではなく、後鳥羽院を中心として人臣が集まる様をも詠み込んだ一首だと解釈できるだろう。

惟明親王は、星という和歌に詠まれることさえ稀な歌材を、わざ

わざ祝の歌の一首に組み込んだ。星の歌として真っ先に思い浮かぶのはやはり右京大夫の歌であろう。坂田氏(18)は「右京大夫ほど星を題材として、抒情を直接的に表した歌は、やはりない」とし、「星空への感動と驚きをありのままに詠じたこと、そこにこそ右京大夫の独自性と価値が認められるのではないだろうか」としている。

建礼門院右京大夫は、高倉天皇の中宮であった建礼門院徳子に仕えており、惟明親王とはほぼ同時代に生きた歌人である。同時期に、全く異なる星の歌が詠まれたことにはもう少し注意が払われてもよいだろう。惟明親王の②の歌は、星空の美しさを以てして祝意を詠んだところに、その独自性と価値があるのではないだろうか。

坂田氏(19)はまた、鎌倉時代の星歌のもう一つの特徴として、星が叙景歌の中で詠まれるようになったことも指摘されている。

鎌倉時代のもう一つの大きな特徴として、叙景歌の中に星が詠まれるようになったことが挙げられる。平安時代において、月と共に詠まれても、影の薄かった星であるが、冬の景色の中にその冴えわたる光が詠まれるなど、明らかに注目を浴びる傾向を見せている。また、露と共に詠まれるなど、新たな美が見出されてもいる。

惟明親王の祝題五首はすべて視覚的な歌として読める構成になっていることは、すでに言及した通りである。つまり、惟明親王は叙景歌として星を詠むという鎌倉時代の傾向の先駆者であったと言える。加えて、星の林や星の宿りというような慣用表現を全く使わず、「君が代」の永久性を数えきれぬ星に喩えるという新しい発想で祝歌を詠んだといえるのである。

星の数に焦点を当てた詠み方は、先にも引いた『新撰和歌六帖』の星題の一首、「くるるまに出でそふ星のかずしらずいやましにのみなるおもひかな（三四二）」にも見られる。また、星の数を数えることで祝意を表す例としては、先掲の『玉葉和歌集』の「天つ空星のくらゐをかぞへてぞ行末とほき御代はしらるる」があり、次の『白河殿七百首』にも似たような歌がある。

寄星祝

あきらけき星のはやしもかぞへつつ君がよはひの有かずにせん

（『白河殿七百首』・雑百五十首・六九四・皇后宮大夫(20)）

右の歌は、惟明親王の星歌を踏まえたものと見てもよいのではないだろうか(21)。とはいえ、『玉葉和歌集』の歌も『白河殿七百首』の歌も「星のくらゐ」や「星のはやし」という定型句から抜け出せていない。その点でも惟明歌の新鮮さが際立つのである。

加えて、田仲氏の指摘する惟明親王の漢籍への志向が現れた一首でもあると言えるだろう。続く③の歌も、漢籍の故事に由来した表現を用いた歌であり、部立の構成という面からも親王の工夫が感じ取れる。特に、②・③の歌ともに同じ発想源に拠ったと思われる表現が『本朝無題詩』の漢詩に見られた。田仲氏が「いずれも人口に膾炙した馴染み深いものであり、漢籍・漢詩文に直接依拠しての詠作とは別次元の受容と理解すべきであるのかもしれない」と指摘されていたように慎重に検討すべき問題ではあるが、惟明親王が漢詩文由来の表現をどのような先行作品から獲得したのかを探る手掛かりの一つになると思われる。この点については今後の課題としたい。

（注）

(1) 『正治初度百首』の本文は宮内庁書陵部蔵本に拠り、本資料では便宜上、書陵部本を底本とする『新編国歌大観』（CD-ROM版 Ver.2）から引用した。和歌の冒頭には丸数字を付し部立内での位置を示した。また、それ以外の和歌についても『新編国歌大観』（CD-ROM 版 Ver.2）に拠った。なお引用文中にあたって私に傍線等を付した。

(2) 『和歌文学大系49　正治二年院初度百首』（明治書院、二〇一六年）。惟明親王歌の訳注は木下華子氏による。

(3) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）、項目執筆者は渡邊裕美子氏。

(4) 和歌文学大系では、この歌に関して以下のように補注を付している。

漢書・白氏六帖等に見える、漢の武帝が太室山に行幸した際、万歳の声が聞こえてきたという故事と、白氏六帖等に見える、黄河が千年に一度澄み、その時聖人が出現するという故事をふまえる。後鳥羽院を千年に一度の聖人と称える意を込める。当該歌が典拠とする故事は、「水遇一清沙月影山称万歳嶺嵐声」（本朝無題詩・藤原知房）、「山の嵐万世よばふ声をつたへ、池の水も千歳の影を澄まして」（今鏡・すべらぎの上・初春）などと、広く受容された。同時代では、「君が世の十度澄むべき水の色を汲みて知りける山の声かな」（千五百番歌合・藤原有家）などと詠まれている。また、類似表現の典拠の一つだと思われる『白氏六帖』には、巻第二「河四十」に、

見一清於千年〈運命論曰黄河清聖人出拾遺／記曰河千年一清聖王之大瑞〉

巻第十一「銘功第三」に、

山呼萬歳〈漢武時禅嵩山有呼萬歳之／聲三万以三百戸封爲祠戸〉

とある。なお『白氏六帖』の本文は『白氏六帖事類集（一）』（古典研究会叢書漢籍之部第四十巻、汲古書院、二〇〇八年三月）、『同（二）』（同四十一巻・汲古書院、二〇〇八年五月）に拠り、小書部分は〈〉で、改行は／で示している。

(5) 田仲氏は「惟明親王詠の主要先行典拠表現受容一覧」（『中世前期の歌書と歌人』、和泉書院、二〇〇八年一二月）の中で、惟明親王の⑤歌の「本歌もしくは惟明がその発想や表現を受容したと考えられる先行歌」として、『千載和歌集』所収の式子内親王歌「動きなくなほ万代をたのむべきはこやの山の峰の松陰」（賀・六二五）を挙げている。

また、『歌ことば歌枕大辞典』の「藐姑射の山」項目には、「鎌倉初期の新古今歌壇においては、後鳥羽院の仙洞御所を指して詠むことが一つの流行になった。『正治初度百首』などこの時期の応制百首の祝部では、年齢・流派を問わず、出詠歌人のほとんどが「万代・君が代」といった語とともに藐姑射の山を詠んで院の治世を寿いでいる」とある（項目執筆者は長澤さち子氏）。

(6) 田仲洋己「三宮惟明親王の正治初度百首詠について」（前掲『中世前期の歌書と歌人』、初出は『岡大国文論稿』三四号、二〇〇六年三月）。なお、注(4)に引いたように和歌文学大系も補注で触れている。

(7) 三上桂子「和歌に現われた星」（『立教大学日本文学』第二一号、一九六八年一二月）

(8) 高橋弘美「八代集における星歌小考」（『大阪青山短大国文』第二号、一九八六年二月）

(9) 国文学研究資料館、二十一代集データベースに拠る。（http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001501121dai）。「星」「ほし」で検索。また、新古今集までに限定すると七夕歌以外は三五首しかないので、星の美が詠まれるようになるのは新古今以後、玉葉集や風雅集の頃という三上氏の指摘とも概ね合致する。

(10) 『源氏物語』の引用は、阿部秋生他校注・訳『新編日本古典文学全集　源氏物語③』（小学館、一九九六年）に拠る。引用には括弧して新編日本古典文学全集の巻数と頁数を付した。

(11) 万葉集巻第七・雑歌（一〇七二）や『拾遺和歌集』巻第八・雑上にも入首。伊藤博氏によって「星の林」も「月の舟」も漢文的表現であることが指摘されている。（『萬葉集釋注四』一九九六年八月、集英社）

(12) 坂田光代「建礼門院右京大夫と星の歌」（『玉藻』四〇巻、二〇〇四年一一月）

(13) 「祝題」は千五十一番一～千百二十五番まで。千九十五番の判詞には「左右共に難なく見えはべり。但、右はいますこしめづらしき所まさりてや侍らん」とある。

(14) 注(8)掲出論文。

(15) 本間洋一注釈『本朝無題詩全注釈一』（新典社、一九九二年三月）。書き下し文も同書に拠る。

(16) 吉田賢抗著『新釈漢文大系第1巻　論語』（明治書院、一九七六年二月）。書き下し文も同書に拠る。

(17) 中島千明著『新釈漢文大系第79巻　文選（賦篇）上』（明治書院、一九七七年一月）。書き下し文も同書に拠る。

(18) 注(12)掲出論文。

(19) 注(12)掲出論文。

(20) 『白河殿七百首』は、文永二年（一二六五）七月七日に禅林寺殿（白川殿）で行われた当座の探索歌会。皇后宮大夫は花山院師継。

(20) 中川博夫氏は、『玉葉和歌集』の歌について、「天つ空――天空の意に、それに喩えられる皇居・宮中の意を重ねる」、「星の位――星座の意に、それに喩えられる群臣の列座の意を重ねる」と注を付し、「天空の星座、それに同じ宮殿の群臣の列座を数えることで、その数の多さ程に行く末が遥かに遠い我が君の御代は、自然とわかるのだ」と現代語訳している。「天空の星座、それに同じ宮殿の群臣の列座を数える」という解釈は、「衆星」の意にかなり近いと思われる（『和歌文学大系39　玉葉和歌集

（上）』明治書院、二〇一六年一月）。

（きたはら　さゆり、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学）